〈青森県史〉の窓 108

津軽の秋と針仕事

福島春那
（県民生活文化課 県史編さんグループ非常勤嘱託員）

針仕事をする女性とエンツコに入った赤ん坊（昭和31年、弘前市周辺）
（佐々木直亮氏撮影、青森県立郷土館提供）

ある秋の夕飯時、窓下で鳴く虫の声を聞いた祖母が「昔だきゃァ、コオロギ、ボドツゲボドツゲって鳴いでるってしゃべったもんで」と、ため息をついた。ボドとは古い布や、そうした布を刺しつづった着物のことをいう。「ボド（古着）継げ」と聞こえるコオロギの鳴き声に急かされるように、昼間の田畑仕事で疲れて眠い目をこすりつつ、囲炉裏端で冬支度のため針を運んだ女性たちの秋の夜長を思わせる言い回しである。

かつての暮らしには、季節ごとの針仕事があった。冬には着物を仕立て春に着て、夏の間には寒い時期に備えて綿を入れた着物や胴着を縫う。そして秋は着物を洗う、いわゆる「洗い張り」の季節であった。まず着物は布へとほぐされ、小川やセキ（水路）、井戸の近くなどで洗われた。冷たい水での手洗いはあかぎれなど手荒れで女性たちを悩ませたが、その一方で、村々の水の豊富なところに洗濯のために女性たちが集まり、そこで交わされる世間話は楽しみでもあった。日が暮れたころ、ジョウバ打ちのトントンという音が響く情景は、着物がまだ身につけられていた昭和20年代ごろにはあちこちで見られたものだという。このトントンという音を聞いて、若者たちが手伝いにやってくると、ふかしたイモやカボチャが振る舞われることもあった。そうして仕上がった布は、女性たちの手で再度着物に仕立てられるのだ。

こうした針仕事は、家を支える女性たちの重要な仕事のひとつであった。衣服は着る者の身を守る役割を持つ。特に、産まれたばかりの赤ん坊を包む産着には、健やかな成長を遂げるよう祈る思いが込められた。例えば、産着に仕立てる布の柄には、麻の葉の模様のものが好まれた。これは魔除けだとも、麻のように強く育ってほしいという願いのためだともいう。また、背守りといって、縫い目のない無防備な産着の背中を守るように、後襟下に縫い飾りをつけるまじないも行われた。県内の例では、旧市浦村脇元（五所川原市）で疳の虫がおきないまじないだといって、赤ん坊のボンノゴ（津軽弁で、うなじを指す）にあたる襟に三角型の布切れをつけたり、鰺ヶ沢町種里や旧碇ヶ関村古懸（平川市）で魔除けや病除けとして、マスをつけた。マスとはいわゆる「括り猿」で、綿を入れた四角い布の四隅をひとつに縫って足に見立てた猿の縫いぐるみである。災厄が「去る」と「猿」をかけたものだともいわれる。

こうした、津軽地方のかつての暮らしについては、今年3月に刊行した『青森県史　民俗編　資料津軽』にまとめられている。各地域の方々に、聞き取り調査や資料調査など様々なご協力を賜り完成した本書、是非とも多くの方々の手に取っていただきたい。